F/T09 フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

新作『火の顔』

演出：松井　周（サンプル）

作：マリウス・フォン・マイエンブルグ

3 月 5 日（木）～8 日（日）

於：東京芸術劇場　小ホール1

photo by Naoaki Yamamoto

“反転するリアル”を描く日本演劇界の新世代・松井周。
ドイツ気鋭の劇作家、マリウス・フォン・マイエンブルグが描く
「現代の狂気」に挑む！

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
制作担当：武田 t-takeda@anj.or.jp　F/T 広報担当：及位（のぞき）、ハッセル toiawase@anj.or.jp

作品について

松井 周が浮かび上がらせる、新たな“リアル”

未上演にして日本劇作家協会新人戯曲賞にノミネートされた『通過』の劇作家デビューから、新作発表のたびに注目を集め続ける松井周。劇団「青年団」に所属し、俳優として主宰・平田オリザが提唱した“現代口語演劇”を体現してきた松井は、岡田利規、三浦大輔、前田司郎に代表される、演劇・ダンス・小説などのジャンルを横断し注目を集める新世代のアーティストたちと並び、劇作家・演出家として強烈な同時代性を持つ作品を発表している。

現代人の希望や絶望をサンプリングするかのように舞台に上げ、現実と虚構の境界を行き来しながら、その価値さえも反転させる世界は、演劇におけるリアリズムを根本から問い直し続け、新たな演劇の未来を予感させている。

今回の公演では、2005 年のドイツ・シャウビューネ劇場来日公演が記憶に新しいマリウス・フォン・マイエンブルグ作『火の顔』を演出。自身が主宰する劇団「サンプル」公演の最新作『家族の肖像』において、“家族なき時代の家族”をつくりだすことを試みた松井が、どこにでもあるドイツ中流家庭の崩壊と狂気が描かれた本作と日本とを、どのように接続させるのか。その“作為”に観客はたちまちに引きずりこまれていくだろう。

不可思議なほどに現代日本とリンクする戯曲『火の顔』

1998 年、マリウス・フォン・マイエンブルグがベルリン芸術大学在学中に執筆した処女戯曲『火の顔』は、ドイツ・ミュンヘンで初演され、その後ドイツ各地の劇場で上演された。シャウビューネ劇場来日公演では、トーマス・オスターマイアーによる洗練された演出で上演。自傷、引きこもり、親殺しなど、現代日本の抱える問題と戯曲世界の強い関連性が、日本の観客を驚愕させた。

あらすじ

父、母、姉、弟、一見何不自由なく暮らしている家族。両親は子どもたちにやさしい笑顔で接しているが、そこに真の意味の相互理解が欠けていることがわからず、両親と子どもたちの間のコミュニケーションは完全に断絶している。

弟のクルトは火の哲学に惹かれ、物事の表面しか見ない両親を侮蔑する。危うい均衡を保っていた家族関係は、姉オルガの恋人パウルの訪問をきっかけに崩れ始める。そんなとき、クルトが火傷をする事件が起きて・・・。

演出ノート

松井　周（サンプル）

ここに出てくる家族をことさら歪んだものとして描こうとは思わない。
彼らのディスコミュニケーションの裏には依存心が見え隠れしていて、滑稽ですらある。スカスカの軽さがある。でもそれは日本の家族だって同じだろう。日本だけでなく、どこの国の家族にも通じるかもしれない。
その一方で彼らは成熟することを望む。しかし、そのモデルが親にも子供にもわからない。親も子供も近代的自我、つまり「個人」になることができない。
「依存と成熟に引き裂かれた家族」とはやっぱり現代の家族のテーマであり、だからこれは普通の家族の物語なのだ。
モデルがない中で家族を演じ続けようとする彼らは悲劇的であろうか？いや、そんなことはない。彼らの中にちらちらとほの見える欲望の炎に希望を見出すことは決して不可能ではない。俳優の身体がそれを証明すればいいわけだ。

アーティスト・プロフィール

演出：松井　周（サンプル）　Shu Matsui

1972 年東京生まれ。96 年、俳優として劇団青年団に入団。俳優活動を続けながら戯曲を執筆し、日本劇作家協会新人戯曲賞の最終候補作に二度選ばれる。現在は青年団での俳優活動に加えて、自作を演出する劇団サンプルを立ち上げ、劇作・演出活動にも意欲的に取り組んでいる。

自作の戯曲（すべて作家本人の手で演出）

- 『通過』（2004 年 5 月、青年団若手自主企画、こまばアゴラ劇場）：第 9 回（03 年度）日本劇作家協会新人戯曲賞の最終候補作。
- 『ワールドプレミア』（05 年 5 月、青年団若手自主企画、こまばアゴラ劇場）：第 11 回（05 年度）の日本劇作家協会新人戯曲賞の最終候補作。
- 『地下室』（06 年 5 月、文学座＋青年団自主企画交流シリーズ、アトリエ春風舎）
- 『シフト』（07 年 1 月、青年団リンク・サンプル合同公演、アトリエ春風舎）
  以後、自作を演出する集団サンプルが青年団から独立。
- 『カロリーの消費』（07 年 9 月、サンプル、三鷹市芸術文化センター星のホール）
- 『家族の肖像』（08 年 8 月、サンプル、アトリエ・ヘリコプター）

自作以外の戯曲の演出

- サラ・ケイン作『パイドラの愛』（2008 年 2 月）
  （文学座＋青年団自主企画交流シリーズ、サイスタジオコモネ A）

松井周の戯曲には、人間関係の奇妙な歪みがある。第一作の『通過』（2004 年初演）では家族の輪郭は崩れ、登場人物たちの社会的な人間関係は崩壊してしまう。しかし劇作家は、希望と絶望が混在する歪んだ風景をそのままに留めておく。登場人物たちの何気ない仕草や言葉のささいなニュアンスに、日本の現代社会の抱える問題が浮かび上がるのである。

得体の知れない自然食品の製造工場とそこに集まる疑似家族の危うさを描く『地下室』、去勢手術を受ける男のとまどいをコミカルに描く『ワールドプレミア』、血縁を重視する土着の共同体に婿入りした男の奇妙な生活を描く『シフト』、施設に預けた寝たきりの母親が介護士によって誘拐される『カロリーの消費』、40 歳を過ぎても引きこもったままの男とその母親に接点のある人々の生活を描く『家族の肖像』。これらの戯曲には、理念や展望を構想する余裕を失った人々の姿が、ある時はシリアスに、ある時はアイロニカルに描き出されている。日々の出来事を片づけているうちに、知らずに遠いところに来てしまった人々の姿を、松井周は描き続けている。

執筆：新野守広（評論家・立教大学教授）

作者プロフィール

作：マリウス・フォン・マイエンブルグ

(c) Iko Freese/drama-berlin.de

1972 年、ドイツ・ミュンヘン生まれ。94 年～98 年にベルリン芸術大学で劇作を学び、在学中に執筆した『火の顔』を 97 年に発表。98 年からベルリン・ドイツ座構内の仮設スペース「バラック」の共同制作メンバーとして、演出家トーマス・オスターマイアーらとともにドイツ演劇の「新リアリズム演劇」と呼ばれる新しい流れの一翼を担う。99 年、「バラック」のチームは、シャウビューネ劇場に移り、座付き劇作家兼ドラマトゥルクとして活躍する。以後、『パラサイトたち』『冷たい子ども』『エルドラド』などの戯曲を執筆するとともに、サラ・ケイン『渇望』などの戯曲翻訳や舞台演出にもたずさわる。

出演者プロフィール

猪股俊明　Toshiaki　Inomata　：父

福岡県博多出身。舞台芸術学院入学を機に上京。テントにて旅公演、一人芝居興行などを経て、中村座解散後の金杉忠男アソシエーツに入団。現在はフリーの俳優として活動し、ファイン・ベリー、ONEOR8、菅間馬鈴薯堂、青年団、ハイバイ、クロカミショウネン 18。近作のハイバイ公演『て』、クロカミショウネン 18 公演『祝/弔』では、それぞれ父親役として出演し、観客に強烈な印象を残した。

大崎由利子　Yuriko Osaki　：母

1975 年より劇団中村座（後に金杉忠男アソシエーツと改名）に参加。98 年の解散までほとんどの作品に出演。解散後、『AMERIKA』『失踪者』『審判』『城』（作：F・カフカ、演出：松本修）、『ミレナ』『朝焼けのマンハッタン』（作：斎藤憐・演出：佐藤信）、『ファウスト』(作：ゲーテ・演出：白井晃）等に出演。また、『上野動物園再々々襲撃』などの青年団 本公演や青年団の若手演出家作品にも多数出演している。松井作品への出演は今回が初めて。

野津あおい　Aoi　Nodu　：オルガ（姉）

1985 年、東京生まれ。俳優として活動しながら、演出、振付などもおこなう。出演作に、サンプル『家族の肖像』、乞局『杭抗』、五反田団『生きてるものはいないのか』など。

菅原直樹　Naoki　Sugahara　：クルト（弟）

1983 年栃木県生まれ。桜美林大学卒業。主な出演作品にOPAP＋青年団『もう風も吹かない』（作・演出：平田オリザ）、田上パル『そうやって云々頷いていろ』（作・演出：田上豊）、急な坂スタジオ『ラ・マレア 横浜』（作・演出：マリアーノ・ペンソッティ）、多摩川アートライン 2008『川のある町に住んでいた』（作・演出:柴幸男）などがある。

©高橋エイジ

岩井秀人　Hideto Iwai　：パウル

俳優、作家、演出家。「大衆の流行やムーブメントを憧れつつ引いて眺める目線」を武器に、家族、引きこもり、集団と個人、個人の自意識の渦、等々についての描写を続けている劇団ハイバイの主宰。ハイバイでは全作品の作・演出を担当し、外部作品への脚本提供、演出なども手がける。また俳優としても東京デスロックなどに出演し、2008 年に自身の家族をモデルに描いた『て』では自らが母役を演じ、話題となる。09 年 6 月にこまばアゴラ劇場での新作公演を控える。

特別寄稿

上演作品『火の顔』の解説と演出家松井周への期待

新野守広（評論家・立教大学教授）

『火の顔』（1998 年初演）は、マリウス・フォン・マイエンブルクの第一作である。2005 年 6 月、ベルリンからシャウビューネが来日した際に、世田谷パブリックシアターで『人形の家』とともに上演された。さらに世田谷パブリックシアターは、マイエンブルクの『エルドラド』（05 年 6 月）と『醜男』（08 年 6 月）をシアタートラムでのリーディング公演に取り上げている。

マイエンブルクは、72 年にドイツ南部のミュンヘンに生まれた。ベルリンの壁崩壊後の 92 年にベルリンに移り、94 年から 98 年にかけてベルリン芸術大学に在籍して創作コースで劇作を学んだ。98 年からはベルリンのドイツ座構内の仮設スペース「バラック」の共同制作メンバーとなり、演出家トーマス・オスターマイアーらとともにドイツ演劇の新しい流れの一翼を担った。当時、サラ・ケイン、マーティン・マクドナー、デイヴィッド・ハロワー、マーク・レイヴンヒル、マーティン・クリンプといったイギリスの若い劇作家たちに注目が集まりはじめていた時期だった。「バラック」のチームはこれら未知のイギリスの劇作家やブレヒトを取り上げ、大好評を博し、99 年冬にシャウビューネに移った。マイエンブルクは同劇場のドラマトゥルクとなり、以後『パラサイトたち』、『冷たい子供』、『エルドラド』、『醜男』といった新作をコンスタントに発表している。

実は 70 年代以降のドイツ語圏では、ペーター・ハントケやボート・シュトラウスなどの少数の例外を除いて、新しい劇作家は登場しにくかった。斬新な新解釈を提示する演出家が脚光を浴びたからである。当時の観客を惹きつけたのは、演出家の新演出だった。代表的な演出家は、70 年代以降で言えばペーター・シュタインやクラウス・パイマンであり、90 年代で言えばフランク・カストルフだった。たいていの劇場のレパートリーはすでにギリシア悲劇から近代劇までの戯曲で埋まっているので、新進の劇作家の戯曲がかかる余地はほとんどない。したがって、イギリスの若い劇作家に注目が集まった 90 年代後半の気運をとらえてシャウビューネに移ったマイエンブルクの例は、少ないチャンスをとらえてデビューした希な例と言えるだろう。90 年代以降のドイツには、マイエンブルクのほかに、デーア・ローアー（64 生）、ローラント・シンメルプフェニヒ（67 生）、ファルク・リヒター（69 生）らの劇作家が登場した。これらの劇作家たちは、崩れた家族関係や曖昧化する人間関係を描く傾向が強い。シンメルプフェニヒもリヒターも、劇作家の育成に力を入れているシャウビューネに足場を得て、劇作家としての活動を拡げることができたと言える。

ではマイエンブルクの『火の顔』は、どのような作品なのだろうか。先行世代との違いはどこにあるのだろう。

『火の顔』は、父母姉弟の四人で構成される家族が崩壊する様を描いている。反抗期を迎えた弟が、姉との近親相姦的な愛を拠り所に両親や学校を切り捨て、ついには両親を殺害し、自分も自殺するという深刻な話だ。子供たちに理解を示す優しい両親は、幼い姉弟からみれば、幸せな家族の書き割り的な存在に過ぎない。一旦子供たちが問題を起こすと、父は母を責めるだけで、観察者の立場から一歩も踏み出すことがない。母はリベラルな教育を勘違いし、息子の前で平気で裸になるほどデリカシーが欠けて

いる。このような両親の描き方に、マイエンブルクの少年時代を形成したリベラルな社会環境への批判を見て取る批評家もいる。超越的な感覚に惹かれる弟は、自分の顔を火で焼くことで、かろうじて存在のバランスを保っている。この家庭に姉の彼氏が入りこみ、事件が起こる。

ミュンヘン生まれのマイエンブルクは、映画監督ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー（46 年生、82 年没）や劇作家フランツ・クサファー・クレッツ（46 年生）に代表されるミュンヘン出身の社会派の系列に連なる劇作家であるが、社会の矛盾を観客に問いかけた先行世代の劇作家とはかなり異なる描き方をしている。たとえば路上の若者たちのシーンが印象的なファスビンダーの『出稼ぎ野郎』（69 年）は、しらけ切った若者たちの世界にギリシアからの出稼ぎ労働者ヨルゴスが現れることで、外国人に対する偏見や男性社会を肯定するマッチョな男たちを浮かび上がらせる映画である。中産階級出身の夫婦の生活が破綻する様を描く『四季を売る男』（71 年）や、初老のドイツ人女性とモロッコからの若い出稼ぎ労働者の不安定な結婚生活を描いた『不安と魂』（73 年）も、主人公たちと彼らの周囲の人々の生活には社会的な実体があり、彼らの生活の破綻と危機は 70 年前後の西ドイツ社会の矛盾を問いかける性質を持っている。

これに対して『火の顔』の暴力は内向的なものであり、社会的な実体は希薄だ。マイエンブルクには、希薄さを拡大して社会の現在形に迫ろうとするところがある。『パラサイトたち』（00 年初演）では、人間関係はひどく歪んでいる。リンゴ（男）とベッツィ（女）が二人で住むアパートがある。交通事故で下半身麻痺になったリンゴをベッツィは献身的に介護しているが、リンゴはベッツィに感謝するどころか、むしろ徹底的にいじめ抜く。事故を起こした中年男のムルチャーは介護を引き受ける申し出をし、毎日二人の部屋を訪れるが、それは二人の仲を裂く喜びのためである。ベッツィは、ドメスティック・ヴァイオレンスに苦しむ妹を引き取るが、妹は毒づくばかりで、車椅子生活を余儀なくされているリンゴを徹底的にいじめる。このようにいじめ、いじめられる絶望的な生活を繰り返す果てに、妹は自殺してしまう。

ここに描かれた 5 人の男女は、誰ひとり社会的責任を担う主体として行動できない。他人に依存し、いじめられる自分をいじめる相手に見せつける歪んだ自己顕示欲が唯一の規範である。ファスビンダーが描いたような中産階級の破綻や、社会の底辺に生きる人々の価値観を肯定する魅力が、マイエンブルクには欠けている。癒しも希望もなく、ただお互いに依存し合って生きている人々を描く彼の世界は、大きな物語が失われた 90 年代以降の不安定なドイツ社会を浮かび上がらせるのである。

このようなマイエンブルクの世界は、松井周と重なり合うところがある。

そもそもふたりは同じ 72 年生まれだが、劇作家としての松井周もマイエンブルクも、崩れた家族という共通のテーマを持っている。そして、マイエンブルクがドイツの社会派作家と一線を画すように、松井周は宮本研、福田善之、斎藤憐、永井愛、坂手洋二ら社会の矛盾を取り上げる日本の作家たちとは異なる描き方をする。その特徴は、家族や疑似家族を中心とする人間関係の歪みを通して、あいまいでぼかされたように見えて、しかし非常になまなましい触感で、矛盾の実質を客席に伝えようとしているところにあるだろう。

第一作の『通過』では、寝たきりの母を介護する子供のいない夫婦の生活が描かれる。夫は事故で下半身に怪我をしている。この家に妻の兄とその舎弟たちが入り込むと、家族の輪郭は崩れ、「母－息子」、「義兄－夫－妻－夫の友人」という社会的な人間関係は崩壊してしまう。その結果、欲望に歯止めが失われ、目の前で暴力が繰り広げられる。この事態を戯曲は淡々と描くが、もちろんそこには、心の奥底の叫びを観客に伝えようとする劇作家の切実さが感じられる。ただ劇作家は、希望と絶望が混在する歪ん

だ風景をそのままに留めておく。なにも解決しないし、展望も開けない。そもそも登場人物たちは解決も展望も望んでいないようにみえる。未来を切り開く意欲が希薄にも思えるこの人々は、しかし一方で非常に大きな情欲や欲望を抱え込んでいて、市民社会や家族という制度からいつの間にかはみ出してしまった自分をもてあましているようだ。このため彼らの何気ない仕草や言葉のささいなニュアンスに、社会の抱える様々な問題が浮かび上がるのである。

このような歪んだ人間関係のなまなましさは、松井周の世界の基本的な特徴をなしている。得体の知れない自然食品の製造工場を運営する疑似家族の危うさを描く『地下室』、去勢手術を受ける男のとまどいがおかしい『ワールドプレミア』、血縁を重視する土着の共同体の奇妙な生活が主題となる『シフト』、施設に預けた母親が誘拐されてとまどう夫婦を描く『カロリーの消費』、40 歳を過ぎても引きこもったままの男が登場する『家族の肖像』。これらの戯曲では、現代社会の矛盾が解決不能な形で普段の生活と一体化している。登場人物たちはそこから抜け出るすべも、視点も持っていない。しかも彼らの日常は、けっして平穏無事の静かな世界ではない。他人に暴力を加えたり、暴行を受けて恥辱にまみれたりすることがしばしばある。ちょうど 90 年代後半のイギリスに登場したサラ・ケインやマーク・レイヴンヒルたちが描いた暴力に曝し／曝される日常が、松井周の世界にはある。それは、明らかに機能不全に陥っているのに、直したり、修正したりする手段がどこにもない世界である。客席で座って見ていると、自分で舞台に上がって、意見や提案をしたい気持ちに駆られる。しかし、もし彼の舞台に上がったとして、いったいどうすればこの世界は変わるのだろう。おそらく舞台上の人間関係の歪みは、客席で見ている観客にしかわからないのだ。登場人物たちは、観客から見てそれがいかに無策に思えようとも、舞台の上の彼らの時間を丹念に生きていくしかない。ここにはマイエンブルクの描く不安定な世界と同質の時代感覚を感じることができる。

マイエンブルクと出会うことで松井周の世界がどのように変わるのか、一観客としてはとても興味がある。ふたりとも高度成長を達成した後の西ドイツと日本で育ち、豊かな消費社会の内実を体験している。多感な時期を迎えた頃に冷戦が終わり、ソ連が崩壊、湾岸戦争が勃発した。松井周演出の『火の顔』はもちろん興味深いが、さらにその後の松井周の活動にとっても、『火の顔』は意義深い舞台となるにちがいない。

Morihiro Niino / 1958 年生まれ。ドイツ演劇研究者。立教大学教授。シアターアーツ編集委員。AICT（国際演劇評論家協会）会員。著書に『演劇都市ベルリン』（れんが書房新社）、共訳書に『ポストドラマ演劇』（同学社）、訳書に『火の顔』（論創社）、『ゴルトベルク変奏曲』（同）、『餌食としての都市』（同）がある。

キャスト/スタッフ

演出	松井 周（サンプル）
作	マリウス・フォン・マイエンブルグ
翻訳	新野守広
出演	猪股俊明
	大崎由利子
	野津あおい
	菅原直樹
	岩井秀人（ハイバイ）
美術	杉山至＋鴉屋
照明	西本彩
衣裳	小松陽佳留（une chrysantheme）
演出助手・ドラマトゥルク	野村政之
舞台監督	寅川英司＋鴉屋
宣伝美術	京
宣伝写真	山本尚明
制作補佐	遠山ちあき、有田真代（背番号零）
制作	三好佐智子
制作協力	サンプル、有限会社 quinada
主催・製作	フェスティバル/トーキョー

公演/チケット情報

会場	東京芸術劇場小ホール 1
チケット料金	全席自由 一般 3,500 円／学生 3,000 円（要学生証提示）／ 高校生以下 1,000 円
お取扱い	フェスティバル/トーキョー（HPのみ）、ぷれいす（電話のみ）、 電子チケットぴあ（P コード：391-402）、イープラス、 東京芸術劇場チケットサービス 03-5985-1707

公演スケジュール

3/5 thu	3/6 fri	3/7 sat	3/8 sun
19:00	14：00/19：00	14:00/19:00	15:00

F/Tパフォーマンス チケット 2008 年 12 月 18 日（木）前売開始 ※F/T 参加作品は対象外

■チケット取扱

フェスティバル/トーキョー（HP のみ） http://festival-tokyo.jp

ぷれいす（電話のみ） 03-5468-8113（平日 11:00-18:00）

電子チケットぴあ 0570-02-9999（Pコード予約） http://pia.jp/t ※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

イープラス http://eplus.jp ※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。
フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。 ※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券 *選んで観る！* ※お好きな演目を選んでご覧いただけます。（『サンシャイン 63』は対象外）
3 演目 ¥10,000 （¥3,333/枚）、5 演目 ¥15,000 （¥3,000/枚）

◇F/T パス（13 演目）*全部観る！* ※全ての演目をご覧になれます。（『サンシャイン 63』は対象外）
¥30,000（¥2,300/枚）

※F/T 回数券、F/T パス（13 演目）のお取扱いについて
・2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）
・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット *誘って観る！*
チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。（例／¥4,500×2 枚＝¥9,000→¥8,100）
※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

◇学生料金 *学生も観る!*
学生 全演目 ¥3,000（要学生証提示） 高校生以下 全演目¥1,000
※東京芸術劇場中ホール公演は S 席 ※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券（『雲。家。』『サンシャイン 63』） ¥6,400 （¥3,200/枚）
※ぷれいすのみ取扱 ※2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）

3 演目	¥10,000（¥ 3,333/枚）	F/T パス	¥30,000（¥ 2,300/枚）
5 演目	¥15,000（¥ 3,000/枚）	ペアチケット	10% OFF

フェスティバル/トーキョー09 春　開催概要

名称　フェスティバル/トーキョー09 春
Festival/Tokyo 09 spring

会期・会場　2009 年 2 月 26 日（木）〜3 月 29 日（日）
東京芸術劇場　中ホール　小ホール 1・2
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
にしすがも創造舎

プログラム　F/T パフォーマンス　14 演目
F/T 参加作品　5 演目
F/T プロジェクト（シンポジウム/ステーション/クルー）

主催　東京都
財団法人東京都歴史文化財団
フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

共催　社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

事業共催　国際交流基金

協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

助成　財団法人アサヒビール芸術文化財団

後援　外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成 20 年度文化庁国際芸術交流支援事業

提携事業　東京芸術見本市 2009

写真/クレジット一覧

『家族の肖像』(2008 年)

(C)青木司 Tsukasa Aoki

『カロリーの消費』(2007 年)

(C)青木司 Tsukasa Aoki

ポートレート:松井 周

(C)青木司 Tsukasa Aoki

(C)青木司 Tsukasa Aoki

- ご利用になる場合は、写真家のクレジットを必ず併記してください。
- 原則、トリミングおよび加工は不可。